

令和
2年度

施政方針・当初予算

まちの礎を築いた50年間

本年は半世紀ぶりに日本全体が一丸となり、日本のチカラ・可能性を世界に発信する東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。本市におきましても、昭和45年の高浜市誕生から始まり、12月1日には市制施行50周年を迎えます。これまでの歴史を振り返り、未来へつないでいくとともに、高浜市のチカラ・可能性を市内外に発信していく節目の年であり、未来への新たな歩を踏み出す年となります。

我々の先人たちは、この土地の強みを生かした産物を見出し、日本全

国に三州瓦の名を広め、養鶏においても「時代を築きました。土を練り、瓦を焼く、あるいは、自然や生き物を相手に生計をたてる、地域に根ざし、三河人らしく粘り強く辛抱強く取り組まれた成果であると思っております。

また、高浜市はさまざまな人やモノが往来する交通の要所、温暖な気候と好立地であることから企業からも選ばれる土地となり、次第に輸送機器関連の部品工場も増え、それにともない、全国各地から移り住み、新しく高浜市民とされる方もたいへん増えてまいりました。

土地の風土に育まれたもの、また、各地からもたらされた新しいもの、その融合が現在の私たちの「まちの礎」となっております。

この50年の間にまちを支える主要な産業は変化を遂げまいりました。まちに暮らす人も近年では人口に占める外国人の割合が愛知県内でトップクラスに入るほど多種多様になってまいりました。そうしたなかにあっても「ものづくり」の精神やスモールスケールメリットを生かした市民と協働のまちづくりの考え方は引き継がれ続けております。

次世代に向けた未来への投資を

高浜市では、少子高齢化にいち早く対応すべく「福祉でまちづくり」に

取り組むとともに、市民が主役の協働のまちづくりなど、まちづくり協議会を中心とした住民自治の推進に取り組んでまいりました。公共施設の老朽化問題についてもほかの自治体に先駆け、取組みを進めてまいりました。その時々々に先駆的あるいは特色ある取組み事例として、紹介したいこともあります。

これらはみな、将来を生きる世代に向けた「未来への投資」でもありました。先人によって築かれたまちの財産は計り知れないものです。この財産をさらなる未来へとつないでいくために、この大きな節目の年を、「新たなスタートの一年」と位置づけ、本市の半世紀の歩みを振り返り、本市の発展のために「まちの礎」を築きあげてきた多くの先人の方々の努力と功績を市民の皆様と称え、まちへの一層の愛着、そして市民としての誇りを育むとともに、これからの50年先を展望し、将来にわたり住み続けたいまちであり続けられるよう、次の世代へ夢をつなぎ、さらなる飛躍を図るための「まちの礎」をより強固なものへと、今後とも築きあげていきたいと考えております。

令和2年度当初予算策定

次の50年、未来へつないでいくための令和2年度予算編成方針を「新たな50年を切り拓く予算」とし、未来に向けた不断の取組みを決して止めることのないよう、「計画的な事業見直しを前提とした集約化・縮減」、「経常一般財源に着目した積極的な財政

対策」、「重点取組事業への財源配分」という3つの基本的な考え方を掲げ編成しました。

「重点取組事項」とは、公共施設総合管理計画の推進・情報発信の強化・教育環境の向上・ICT教育・防災力の強化につながる事業です。

次の50年を築くための新たなスタート

人工知能やICT技術の進歩など、生産性や効率化が求められるだけ、会費のなかで、メリットを求めているだけ、損得勘定だけでは測れないことを考えるのが「地域づくり」であると思えます。2020年は市制50周年という節目の年ではありますが、単に記念事業を実施するのではなく、今までこのまちに関わってきた人たちに敬意を表し、これをきっかけにまちづくりにかかわる人々を増やしていく、そこから自分の住む地域・まちのことを自分のこととして考える人たちが増えていくことを願っております。

どんなに技術が進歩しても、これまで築きあげてきた高浜市の良さを、これからの高浜市を担う子どもたちにつなげていくことができるのは、いま高浜市に暮らす私たち人間の大人であると考えております。

これまでの50年を振り返り、新たな50年を迎える年、全力で邁進してまいります。

※本文は市議会3月定例会で行った施政方針演説を要約したものです。

先人たちの想いを、
これからの創っていく次世代に
伝える。



高浜市長 吉岡初浩